

衣袋健司 (著)

腹部血管画像解剖アトラス

佐藤達夫

有明医療大学長

画像機器とカラー写真印刷技術の驚くべき発達により、有用な画像診断アトラスが多数出版され、応接に暇がないほどである。このような状況はもちろん医学の進歩にとって歓迎すべきことではあるが、少し不満を抱かざるを得ないのも事実である。

19世紀のはじめ、フランスの内科医ラエンネック（1781-1826）は聴診器を発明・開発し、当時の医学に大きな進歩をもたらした。彼は、患者の生前の詳しい聴診所見と死後の剖検所見の照合を重ね、その成果を900頁に及ぶ大冊（間接聴診法、または、この新しい探究法に主として基づいた肺と心臓の疾患の診断に関する研究、1819）にまとめた。このような間接所見と直接所見を統合した書物が後ろに控えておれば、安心この上もない。

本書の著者・衣袋健司氏が、血管画像で遭遇した珍しい所見について、まだ解剖学教室に勤めていた私のもとに相談に来られたのは、もう30年ほど前のことである。そのとき私は「本当に知りたいことは本には書いてないものだ。自分の手を下ろ

して解剖することからはじめてみなさい」と、半ば突き離し、解剖実習遺体を提供することにより、半ば協力することにした。それ以来、金曜の夜になると、一週間の激務を終えた衣袋氏の姿を実習室の片隅に見ることになった。

本書の序文にあるように、「標準的な血管分岐は半分程度で、残りは亜型」である。血管画像には異常と思われる所見が無数に見出されるであろう。しかし一見、異常所見なるものも亜型の中に取り込む視野を持つことが望まれる。また血管の問題だけに矮小化できないこともあろう。血管は標的器官があつての存在であるし、周囲の構造物や神経との位置関係に影響を受けることも少なくあるまい。解剖体にすがり付いて、どのような小さな変異でも見逃さずに位置関係も含めて剖出し、その詳細所見の吟味と過去の膨大な文献の渉猟を重ねながら実態の解明に取り組まなければなるまい。

本書にみる、日常の読影所見に問題点を見出し、実際の剖出を通じて理解を深めていこうという研究態度

は、ことのほか貴い。それは、われわれ解剖学サイドからアプローチした局所解剖学に欠落しがちなところでもある。また、世に臨床と解剖学との協力を説く声は多い。実際にここ10年余りの間の臨床解剖学の進歩は著しいものが認められる。しかし、進化はしたが深化は不十分であつたのではないか。この労作『腹部血管画像解剖アトラス』をひもとくと、そう感ぜざるを得ない。

著者・衣袋氏の金曜日夜の解剖は現在も続いている。一言でそう言うが、これは大変なことであり、類いまれな努力と研鑽を称えたい。そして、数多くの画像アトラスの中で最も長い生命を約束されたこの本格書に触発されて、腹部以外の部位でも、画像と解剖を高度に結び付けた研究書を世に問おうとする若い学徒が少しでも増えることを期待している。

●B5/頁160/2017年

定価：本体10,000円＋税

[ISBN978-4-260-03057-1]

医学書院 刊